

秋水泡語

卷の三

一九九九年

世に多くの詩人と呼ばれる人々が存在する訳だけど、その中に何人ほど、真の詩人と呼べる人間がいるのだろうか？……

風狂の人は、そんな昔の人々ではない。ただ今も、どこかで、本当の自由を手にして、大変な不自由の中で、人間をキツチリ生きている人々なのだ。そんな訳で、井月、放哉、山頭火はぼくにとつて真の詩人たちなのかも知れない。ひとつの時代の中で、真の暗闇をちゃんと見定めて、その中にちいさな光のような境地を見出し、死んで行った人々。……

永島慎二『世界』連載「風狂の人」最終回の文。

そういう生き方がある。しかし、今年のわたしをふりかえってみて、自由の境地にあつたとは言いがたい。口をついて出た泡語もとぼしく、彩り活気を欠いているように思う。水は涸れてはいないようだけれど。

一月六日

人の生見るべきほどのこと尽きず知盛よりも悪戦すべし

一月十一日

寒鯉が眠る水中舞え雪よ

暮れに寒鯉のあらいを一緒に食べた義母が亡くなった。

一月二十日

大寒の三日月奥歯かんで見る

二月四日

白雪が時の刻みを示し降る

雪の道首をうずめてすくむ鳩

鶏は雪をよるこぶ声上げる

二月十八日

芽を覚ます雨暗き日や春待つ身

アルツハイマーの人と起居をともにすヒトを見捨てず耐えていけるか

二月二十日

雪舞えば少しまなじりつりあげて…

花の香に少しいのちを授けられ

「状況におかれていることは、自由の必要かつ本質的な性格である。」

…サルトル『文学とはなにか』

二月二十三日

木星が金星を衝く有事なり革命せよと天のシグナル

三月七日

言霊を欠いて歌無く騒ぐ東風

三月九日

迷走する世にも桜は四季を為す

三月十日

暁に鳥聞き今日を企てる

三月十六日

春の風邪北と南で槌の音

命題* 「万物は相互作用する存在である」

光を

おまえに見えるようにしたのは

創造主であるこのわたしだ。

音の波を

おまえに聞こえるようにしたのは

創造主であるこのわたしだ。

分子を

おまえに嗅ぎ分けるようにしたのは

創造主であるこのわたしだ。

物質を

おまえに味わい分けるようにしたのは

創造主であるこのわたしだ。

他のものを

おまえが触って感じるようにしたのは

創造主であるこのわたしだ。

そうです、あなたは

それらのものを総合できるようにもされました。

そうして、授けられた知性が

あなたが不在であることさえ教えます。

あなたが空であるとしたら

わたしは何に支えられているのでしょうか。

わたしはどう生きましょうか。

*付則、ゴータマ・シツダルタは創造主を論じなかった。

三月二十二日 柳川の雛祭りを飾る「さげもん」を見物に出かける。道中、粉雪。

不知火の海へ菜の花運ぶ川

菜の花に染まりうなぎの肝を吸う

さげもの下にひっそり雛の壇

三月二十三日

春眠する午後の机上に待つ仕事

三月二十六日

霧の橋彼岸を目指す彼岸過ぎ

霧に立つ辛夷が闇につくる球

三月二十八日

あわただしく列車に乗って閉じる眼に春の陽射しのオレンジの色

三月二十九日

角切った鹿は浜辺に人を追う

結界の外でアサリを採る翁

花冷えに牡蠣の筏も身じろがず

三月三十日

花つぼみ水透き通る錦川

四月六日

風に立つ花それぞれに咲く気概

閉塞の春、蝶となり覚めて見る

BS放送で、1995年のイギリス映画「ウエールズの山」を見る。人間は意味を創り出そうとするものである。その意味とその行為は、本質において素朴なものだが、尊重に値する。他者にとつてもそうだということ。

四月十日

細き雨けむる広野に降る桜

四月十五日

耳すませ人声離れ森の春

森の場はわが非力とも無縁なり

四月十六日

半眼の身に木々めぐる音のする

しやくなげは唱うカジカと山の春

(山中の宿で多人数で座禅)

小糠雨藤色に降る夕間暮れ何ゆえにまたいかに在るべき

四月二十六日

蓮華畑歌口ずさみ行く佳人 (六十をすでに越した人だった。)

竹の子に十日の月のいつくしみ

(月光讃歌)

四月二十九日

「昔日、淵明ハ自祭ノ文ヲ記シ

今日、余嘆キテ惜別ノ文ヲ草ス

母生キテ既ニ渡ル絶遠ノ地」

わたしの母はしんでしまった

それは父が亡くなってまもなくのことだった

それは何千日もかけてのことだった。

七十五のとしに母は今という時を滅した

かぞえきれないほどの過去がよみがえった

そのたびに一瞬の生が回帰した。

「みんなどこへ行ったのか」と百万遍母は言った

「もう帰らなければ」と百万遍母は言った

瞬間、瞬間に、三千大千世界を遍歴した。

春月きようきよう

四月三十日

蓮華畑鋤かれ献上香る土

五月十六日

事無げに自ら熟す桜桃

周辺有事、さつきの上を蜥蜴行く

また、周辺多忙、無句。

「私は自分の信念をねじ曲げて事態に奉仕するよりは、むしろ事態の方が折れるのを待つ。……モンテーニュ 『天上大風』の引用。

五月二十八日

魔女の子か手で九つのシャボン玉

人生を掌にうけ手話の人

蛙鳴く漆黒の田に百の月

五月三十一日

為すことが意味を結ばぬ老いという事実の前にただ立ちすくむ

六月四日

山中のけむり怠惰に誘う初夏

六月九日

よい事もむさぼり為せば度外れと警告を出す生命のリズム

六月二十日

模索するキウイの蔓を刈る身かな

ヒトという自動機械も手探りす

六月二十七日

物思い皐月の月に吠える犬

この国のかって滅んだ文明の書をひもといて居住まい正す

六月二十八日

蜜蜂が精出す梅雨の朝間かな

「人生は舞台」という謂いは、著名な人物達の舞台を見ている観客席もまた舞台であり、かつての人が神という名で呼んだ根源的視点からは、すべての舞台が平等な重要性をもっているということであるだろう。一人のありふれた男もすべての人間と対等な舞台を演じているという気概を持つべきなのだ。

七月七日

クチナシの挿し木一年花一輪

七月八日

三味の音と月下美人の芳香がとける夜風に時をゆだねる

七月十日

元氣出せ子供の子車の御巡幸

娘のところに。明日から家族でバカンスへ。

七月十七日

魂をふと遊ばせる夏花野

涼風と緑が落ちる谷深し

樹々の中呼びかける主黒き猿

七月十八日

夏木立天のしづくの落ちる池

山上の花物語る山の四季

七月十九日

鳴飛んでやや晴れあがる梓川

漱石は、「芸術は自己の表現に始まって、自己の表現に終わるものである」、「芸術家の強みは、自分の作品の出来栄えについて最後の權威が自己にある」という信念をもっているところにある」、と言っているそうだ。

七月三十日

往來の船ゆるゆると海峡に赤とんぼ飛び夏暮れかかる

航跡の波まだ白く暮れる夏

行く船も絶えて夕風橋越える

八月一日

さまざまの思い涌く距離遠花火

遠花火無心の蝉は讚嘆す

八月十一日

変調を来たす日本に囚われて人間という苦勞を生きる

八月十四日

母連れてその父母の墓参らせる愁眉を開くただ須臾の間

炎天下端坐しおわす阿弥陀仏

萩の浦上美術館で「宋磁」展を観る。

神品に対す瓶から蝉の声

水盤に水無く広がる玉ぎよくの海

八月十九日

人というもののげんかい

ほかならぬこのわたくしの…。

されば、願いとしてなくてはならぬもの、
樂を与えることと
苦を抜くこと。

八月二十日

サッカーの練習終えて青年が独りおじぎしグランドを去る

八月三十日

字余りの句に万感の思い湧くわれ無句にして千の虫鳴く

マンデリシュタームの詩を読んでいる。

八月三十一日

秋の夜にドラム叩いて人鳴くよ

九月十日

衰微するぎざし木の葉に見える頃ふと佇んで遠いまなざし

九月十一日

無伴奏チェロ組曲の風は秋

九月十五日

なつかしい唱歌を唄う母の声眼を閉じて聞く虫もまた泣く

人の声天空超えて悲しみの響き届けと放射する波

「敬老」 痴呆は狂気、息子の寿命を縮める刺客

九月二十三日
葦原にシジミ採る船秋彼岸

九月二十五日
鯖曇も青空泳ぐうまし秋

栗の毬よけて茶室へ段上る

明々庵マイマイも居る秋の暮れ

八雲忌の速夜風鈴閑かなり

わが歳に彼岸の花となった人

穴道湖に日の道置いて行く彼岸

落日は八重のとばりを燃やしつつ秋風寄せる湖の彼岸へ

十月五日

コスチューム脱いでモデルは田を守る

十月八日

白秋の雨見て愁い顔の騎士

コスモスは乱舞し蝶は酔い心地

十月十九日

「わたしの悲しみは明るいか」

十字架を崇拜せぬ者にもいかめしい世紀末
保険金のためにわが子を殺す母親のいる末法に
はたして悲しみが残っているか。

笑う男が言うよう、

悲しみがなくてどうして明るさがありえよう

光を見ることを欲する者に

ドン・キホーテの大いなる悲しみを！

「よくよく思考をめぐらせば

われに命を与えしは

不安に満ちた未来の希望」

十月二十三日

相好を崩し唱歌を唄うかお死という法にくずれゆく母

無声にして人を支える十三夜

十月二十六日

退廃を見据え梢に柿一つ

白日起きている退廃を目の前にしながら、自らも熟し
ほっておけば崩れ落ちる柿の実が孤独に耐えている。

十月三十一日

花道を去るコスモスを追う身かな

黄櫨の実はまだはげず待つ熟す時

山と川と人のうごめき国見する

十一月九日
迷い道しぐれは晴れて笛の音

十一月十日
生きあぐね桜紅葉に残される

十一月十二日
陽さんさん風と木の葉と讃嘆す

石路の花にもめぐむ小春の陽

十一月二十四日
悪戦の手負いを照らす大き月

十二月二日
焚き火して烏と語る朝の茶事

(うらやましい人がいる)

十二月七日
師走の朝遠い闇から鶏の声

十二月八日
霜の野に伏して緑を磨く草

十二月二十日
雪降って過ぎ行く時に気づく朝

十二月二十一日 陽が射して間近に坐る雪の山

十二月二十二日 凍えつつ月の光明求め行く

夜回りの声冴えわたる月にまで

十二月二十三日 ボール蹴る影長くして冬至明け

十二月二十五日 渡り鳥はぐれ逆旅に降るしぐれ

ささやかな冬の一日愚者として

十二月二十九日 行く年や夜なべ仕事の障子張り

十二月三十日 白拍子トンネル雪の裾模様

十二月三十一日 千年紀送るトンビは空高く螺旋を描く明日を期して

二〇〇〇年 正月
徐山亭 謹製



バラトインスキイ

わたしの才は貧しく 声は低い

けれどもわたしは生きている この地上にも

わたしの存在を懐かしむ者もあるだろう

遠い後の世の人は はたしてわたしの詩に

わたしの存在を見出してくれるだろうか

そうしたらわたしの心はその人の心と結ばれるだろう

同世代に友を見いだしたように

後の世の人の中にも わたしは読者を見いだすだろう

